

ジョジョの奇妙な冒険
～空条承太郎と9人の女神～

ガリユウ432

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代の日本。この日本では不可解なことが起きていた。それは、スタンド使いの増加。ここ数年、スタンド使いが急増しているのだ。そんな世界線の日本の東京にある音ノ木坂学院にもスタンド使いが現れたという情報が。空条承太郎はその情報を確かめるべく、この学校を訪れた。空条承太郎と9人の女神、そしてこの者達を取り巻く人間達による、不思議な冒険譚である。

この作品はクロスオーバー作品です。双方の世界観が大きく損なわれる場合がありますのでご了承ください。時系列はアイスオブヘブン終了後の、5部辺りです。が、ア

イズオブヘブン後なので5部主要キャラや3部主要キャラが普通に出てきたりします。
(ポルポル君など)

目次

63

5話 孤独な天国（ロンリーヘブン）

と恋の合図（ラブ・シグナル）―― 69

6話 孤独な天国と恋の合図 その

《設定集》

1

2

82

第一部 Nine Goddess

1話 空条承太郎、音ノ木坂学院に

来る！―― 9

2話 肩書きのない少女―― 28

3話 不可思議なる境と未来の花

38

4話 愛しき挑戦者《ダーリン・チャ

レンジャー》―― 47

EX話 バレンタインという文化

クール その1―― 91

8話 メイデン・スタイル・ラブ・ス

クール その2―― 103

Love Live A—Go!Go!
Love Live A—Go!Go! 《設定集》

《時系列、キャラクターについて》

ラブライブ側の時系列に合わせているが、ジョジョ側のキャラクターはアイズオブヘブン終了後の世界線で全員5部時点での年齢となっている。アイズオブヘブン終了後の世界線なので、3部キャラは全員生存&ジョセフは波紋を継続して使っているという設定にしています。

そして、ジョジョ側は5部以降のキャラクターで死亡キャラが生存していたりします。双方ともに、原作キャラが死ぬことはありませんが、作品の性質上、キャラクターが重傷を負うことがあります。なお、オリジナル設定として、承太郎一家は5部開始時点で日本に帰ってきてきているという設定になっています。なお、5部までの原作ストーリーとは大きくかけ離れている箇所もございます。

《キャラ図鑑》

空条承太郎 《Kujo Jotaro》

male age. 30

STAND NAME / 星の白銀《スタープラチナ》

破壊力A / スピードA / 射程距離C / 持続力A / 精密動作性A / 成長性E

SKILL / ひと並外れたパワーと機械にも優る精密動作性をもつ。

時を止める《スタープラチナ・ザ・ワールド》

真実を上書きする《スタープラチナ・ザ・ワールド・オーバーハ

ブン》

SPW財団から音ノ木坂学院にスタンド使いが現れたという情報を受け、やって来た男。海洋学者で、大学教授もしている。クールで表情をあまり表には出さないが、穂乃果たちに勉強を教えるなど、優しい一面も持つ。学校に行かない日は、近くの大学で講義を行ったり娘と妻と共に街や海に出かけているようだ。(アイズオブヘブン終了後の世界線なので、スターダストクルセイダース陣は全員生存しています。)

空条徐倫《Kujo Joryne》

female age 10

空条承太郎の愛娘。つい最近まで承太郎と母親とともにアメリカに住んでいたが、承太郎の仕事での日本渡航が増え、日本に引っ越してきた。普段は日本の小学校に通っているが、休みの日には音ノ木坂学院に遊びに来たりする。パパ大好き子。時々、彼女

の身の回りでは不可解なことが起きるようだ。

空条エマ《Kujo Emma》

female age. 29

空条承太郎の妻、徐倫の母。優しく、脳天気な性格で承太郎からの日本への突然の移住も二つ返事で快諾した。どこかホリイに似ている。普段は家で専業主婦として家事を行っているが、徐倫と遊んだり、徐倫同様音ノ木坂学院に遊びに来たりする。

高坂穂乃果《Kousaka Honoka》

female age. 16

STAND NAME / 肩書のない少女《ノーブランドガールズ》

破壊力C / スピードB / 射程距離C / 持続力B / 精密動作性C / 成長性A

SKILL / 触れたものを導かせる

《ノーブランドガールズが触れたものを穂乃果が『導かせる』事が出来る。例えば、戦いたくない相手に対しては相手に触れることさえできれば『高坂穂乃果の元から退却する』という導きを与え、不戦勝にすることも可能。触れていた時間によって、導ける程度が変わる。》

音ノ木坂学院の2年生で、スクールアイドルグループ、μ'sのリーダー。スタンドは元々持っておらず、当初はスタンドが見えなかったが、承太郎が来る直前辺りから不

可解なことが起きだし、戦いの中でスタンドが発現した。スタンド使いになり、正気を失った仲間を取り戻すべく、持ち前の元気さと、前向きさで敵に挑む。承太郎のことは優しいお兄さんというイメージ。

—————

南ことり《Minami Kotori》

female age 16

STAND NAME / 不可思議なる境《ワンダーゾーン》

破壊力A / スピードC / 射程距離C / 持続力C / 精密動作性D / 成長性B

SKILL / 境に入った者を『おやつ』にする

《ことりの足元から『ことりが射程距離内で指定した範囲』を《境》とし、そこに入った者に波動砲を発射する。そして、波動砲は範囲内なら自由に操れる。入った時点で無条件に発射される訳ではなく、ことりが発射するかを指定することも可能。波動砲に当たった者はエネルギーを吸収し、ことりにうつしたり、味方に受け渡すことも出来る。》

音ノ木坂学院の2年生で、*μ's*の衣装制作役。ほんわかした性格で優しい。スタンドは前から発現していたが、理解されるものでは無いので隠していた。戦いはあまり好きではないが、スタンドの能力が能力なので前線で戦うこともしばしば。手探りで頑張ったりつつも、持ち前の前向きな気持ちで敵に立ち向かう。承太郎のことは怖いけど優しい

人というイメージ。

園田海未《Sonoda Umi》

STAND NAME / 未来の花《フューチャーフラワー》

破壊力D / スピードC / 射程距離B / 持続力A / 精密動作性B / 成長性A

SKILL / 物や人を未来へ送る

《スタンドがホールを作り、そのホールの中に入ったものを『未来』に送ることが出来る。例えば、スタープラチナのベアリング弾を呑み込み、一定時間後、呑み込んだ場所から弾が『送られてくる』というもの。μ sの中でも、かなり未完成なスタンドのため、飲み込める時間も最大で1、2分であり、その時間も飲み込んだもののエネルギー量で左右される。ある程度本来の姿に戻すことも可能。本来の姿からあまりにもかけはなれていると不可能》

音ノ木坂学院の2年生でμ sの作詞担当。とても真面目な性格で優しい心の持ち主。スタンドは承太郎が来る直前くらいで発現。最初は何者かに操られ、承太郎たちの前に敵として立ちはだかるが、スタンドの未完成さをつかれ、敗れる。正気になってから、自分が成長する為にも、みんなを守る為にも、スタンドを駆使してみんなと共に強敵と戦う。承太郎のことは尊敬できる人というイメージ。

西木野真姫《Nishikino Maki》

STAND NAME：愛しき挑戦者《ダーリン・チャレンジャー》

破壊力D／スピード―／射程距離E／持続力A／精密動作性―／成長性B

SKILL／メスで切った相手の体調を変化させる

《メスの形をしたスタンド、愛しき挑戦者で斬った相手の体調を操ることが出来る。例えば仲間を斬ってその仲間の体調を良くし、自然治癒力や身体能力を上げたりできる。逆に敵を切り付けることで体の能力を下げ、さらに極限に悪くすれば、体の内部からダメージを与えられることも。》

音ノ木坂学院の1年生で、 μ sの作曲担当。とても気が強く、どこか正直になれない性格だが、優しい心の持ち主。スタンドは海未と同時期くらいに発現。承太郎たちと出会った時は海未や絵里のように操られてはならず、自我がはつきりしており、戦わずして仲間になったが、当初は承太郎のことを今回の一連の騒動の原因だと考えていたが、承太郎と考えを共有し、誤解が解け、和解。バラバラになった μ sを元に戻すべく、みんなと共に戦う。承太郎のことは頼れる人というイメージ。

星空凛《Hoshizora Rin》

STAND NAME：恋の合図《ラブ・シグナル》

破壊力B／スピードA／射程距離A／持続力D／精密動作性C／成長性C

SKILL／相手の発した音をエネルギーに変え、攻撃する

《小学生くらいの体長の遠隔操作型のパワー型スタンド。発現時は地面や壁に潜行しており、相手が発した音（足音やものを落とした音など）をエネルギーに変え、攻撃する。出だしが1番破壊力もスピードもあるが、エネルギーにできる音がない状況で、何も無い空間で行動すると簡単にパワーダウンしてしまう。》

音ノ木坂学院の1年生で、μ'sのメンバーの1人。ハードルとサッカーが得意なスポーツ少女。小泉花陽とは幼稚園来の付き合いの幼馴染。いつも元気が有り余っており、感情がとても豊か。スタンドは真姫に限らず、ことり以外はほとんど同じタイミンで発現している。最初は、操られた状態で花陽と共に承太郎たちの前に立ちはだかるが、時止めとことりのスタンドにより撃沈。真姫からの誘いにより、μ'sを元に戻すことに賛同。承太郎のことは力強いお兄さんというイメージ。

小泉花陽《Koizumi Hanayo》

STAND NAME：孤独な天国《ロンリーヘブン》

破壊力―／スピード―／射程距離B／持続力A／精密動作性―／成長性D

SKILL／射程距離内の物質や生物を2つ以上の集団にさせる

《本体自体はかなり小型な特殊型スタンド。一切攻撃力を持たず、サポート専用のスタンドと言っても過言ではない。相手を集団に『強制的にさせる』ため、独立を許さず、独立している場合には集団に向かって高速で移動させる。その際にダメージが発生する場合もあり。なお、スタンド能力は本人にも影響する。》

音ノ木坂学院の1年生で、*μ* *s*のメンバーの1人。凜と真姫に後押しされる形で、*s*に加入したが、本当はアイドル好きで心優しい穏やかな少女。凜とは幼馴染。最初は、凜と共に操られた状態で承太郎の前に立ちはだかり、スタンド能力で承太郎たちを苦しめたが撃沈。以降、仲間となり、*μ* *s*復活に奮闘する。承太郎の顔を見る度驚くほど、強面に離れていないらしい。

第一部 Nine Goddess

1話 空条承太郎、音ノ木坂学院に来る!

この物語はフィクションです。実在の人物、及び団体には一切、関係は有りません。

—————
現代の日本。この日本ではおかしなことが起きていた。

スタンド使いの急増。本来、スタンドを持つ世界線のない者がスタンドを持つ事態が発生している。

その『スタンド使いが急増している事態』を調査するべく、SPW財団スピードワゴンはスタンド使いが現れてしまった人間を探し出し、最強のスタンド使い、空条承太郎に現地調査を依頼するのだった。

そして、依頼を受けた空条承太郎はとある学校に来ていた。

(SPW財団からの手紙……。この『音ノ木坂学院』にスタンド使いが発生したという情報は確かなのだろうか。詳しくは知らないが、音ノ木坂学院にはμsというスクールアイドルが存在しており、そこにスタンド使いが潜んでいるとの情報……。杞憂な気がするが……。)

ひとまずどうこの学校に入ろうか悩む。インターホンを押せばいいのだが、バカ正直にスタンド使いを探しに来たなんて言えば一瞬で変質者扱いされることだろう。スタンドはスタンド使いにしか見えない。一般人には見えないものだ。スタンドを出したまま歩くのも一つの手だが、入らなければ始まらない。

すると、SPW財団から電話が掛かってきた。

「・・・そうか。分かった。感謝する。」

「どうやら、『スクールアイドルの取材』として話を通していろいろらしい。そこからは俺次第ということか。」

ひとまずインターホンを押し、出てきた女に、理事長室に通された。

—————

理事長室に入り、応接のテーブルに座らせられる。

スピードワゴン

「今回、スクールアイドルの取材をさせていただきたくSPWマガジンの空条だ。よろしく頼む。」

「そう言い、名刺を理事長の女に差し出す。」

「今回はオフアアをいただきありがとうございます。私はこの音ノ木坂学院理事長の南です。・・・なんでも、アメリカの雑誌の取材だそう。あの子達も喜んでいます。」

「それはどうも。いい記事になるよう、しっかりと取材をさせてもらおう。」

「ええ、よろしくお願いします。」

……しかし、廊下を歩くのは少し避けるか。

やはりここは女子校。女が多い。正直承太郎にとつてあまり嬉しい空間ではない。

「……す、すごく背が高くてイケメンな人……!?!」

「なんでも、μ sの取材なんだって!」

「きゃー!高坂さん達凄いつ!!」

……やれやれ。

……しかし、この学校のスクールアイドルは校内でもすごい人気を誇っているようだな。

理事長から教えられたルートを通ると、扉に『アイドル研究部』と書かれた部屋があった。

名義上ではアイドル研究部なんだな。

コンコン……

「はい、どうぞ!!」

中から元気な返事が返ってきたので扉を開ける。

「失礼する。SPWマガジンの取材担当の者だが……。」

すると、茶髪のサイドテールの女子が近づいてくる。

「今日はよろしくお願ひします！」

「あ、ああ。」

「改めて、私はSPWマガジンの空条だ。」

9人いたので、9枚名刺を1枚ずつ渡す。

「空条承太郎さん……。」

「今回取材するにあたって、個々に質問もしようと思うから、それぞれ自己紹介もして欲しい。」

そういうと、順番を決めていたようで、真ん中にいた、先程で迎えてくれた女子が始める。

「高校二年生、高坂穂乃果です！よろしくお願ひします！」

「高校二年生、園田海未です。よろしくお願ひします。」

「高校二年生、南ことりです！よろしくお願ひします。」

「高校1年、西木野真姫よ。よろしく。」

「高校一年生の小泉花陽です！よろしくお願ひします！」

「高校1年の星空凛にゃー！よろしくにゃー!!」

「高校三年生の東條希です。よろしくお願いします。」

「高校三年生の絢瀬絵里です。よろしくお願いします。」

「高校三年生、矢澤にこです!よろしくお願いします!」

・・・ふむ。挨拶の時点で怪しいところはない、か。

その後は普通の質問。まあ、普通に取材を続ける。警戒心を解くためだ。急に来た取材にスタンド使いか?なんて聞かれても危ないヤツ扱いされるだけだ。

そして、各個人に2回は質問を終えた頃。

「・・・さて。本題に入ろう。その前に、みんなに謝るべきことがある。」

「あ、謝るべきこと?」

承太郎はその事を言う前に、目の前に置かれたお茶を一口飲み、一息をついた後、口を開いた。

「私は、SPWマガジンの人間ではなく、SPW財団の人間だ。とあることを調査したくて、ここに来た。それと、SPWマガジンという雑誌は存在しない。」

「なっ!?!」

「SPW財団!?!」

絵里が驚く。

「SPW財団を知っているのか?」

「え、ええ。授業でこの前、現時点で世界で一番と言つていいほど稼いでいる財団だと……。」

「まあその認識で間違いないだろう。騙すような形ですまなかつた。しかし、今回の取材は無駄にはしない。何らかの形で、活かすことにしよう。」

「じゃあそんな方がなぜ……。」

海未が気になり、承太郎に聞く。

「……今から変なことを聞くかもしれないが、真面目に答えて欲しい。最近、君たちの身の回りで、不可解なことが起きたりしなかつたか？例えば、その前日までなんともなかつたのに、高熱を出したり、物がひとりでに動いたり……。どんなに些細なことでもいい。そのようなことが起きなかつたか？」

承太郎から投げかけられた、先程までのスクールアイドルに対する質問とは全く異なる、関係の無い質問。だが、μ'sの9人にとってはある意味一番重要な質問ではあつた。

一番最初に口を開いたのは穂乃果。

「一番最近でいえば、この前転んで階段から落ちたと思つたけど、無傷で、地面の近くにふわあつと着地した気が……。」

恐らく無意識にスタンドを出現させてスタンドで受け止めたのだろう。

その次に口を開いたのは海未。

「昨日弓道で使っていて折れてしまつて捨てたはずの弓が何故か部屋にあつたんですよ……。その時は不思議に思いつながら捨てましたが……。またありそうな気も……。」
その後も、sの9人は各個人がそれぞれ体験した『不思議な出来事』を口にしていく。承太郎は彼女らの話を聞き、確信する。

……彼女ら9人に、『スタンドが発現した』と。

「じゃあ最後の質問だ。……『スターワラッチこいつ』が見えるか?」

ズアオツ!!

「あつ!? 承太郎さんの背後にもう一人男の人が現れた!」

海未が驚く。

周りを見ると、海未だけでなくそれ以外のメンバーも驚いているようだ。

「く、空条さん、それは一体……。」

花陽が恐る恐る聞く。

「これはスタンドと呼ばれるものだ。」

『『スタンド……?』なんですか……。それは?』

「スタンドとは「パワーを持った像（ヴィジョン）」であり、持ち主の傍に出現してさまざまな超常的能力を発揮し、他人を攻撃したり持ち主を守ったりする守護霊のような存

在だ。なぜ現れるのか、なぜ出現しただしたのかもハッキリはしているが。何故君たちに発現したのかは分からない。」

「・・・な、何言ってるのか良くわかんないや・・・。」

穂乃果が苦笑し、頭を搔く。

「まあそんなものだ。私も最初、発現した時は悪霊なんかだと思っていたものだ。だが、その力は君たちを守ってくれるのは間違いない。」

・・・だが、何故、このタイミングでしかも、『彼女ら9人に』発現したのだろうか。何か戦いに巻き込まれるとは思えないし、ジョースター家に関係ありそうな人間もいない。DIOの影響にしては遅すぎる。・・・ここで、この学校で不可解なことが起きるとでも言うのだろうか。

「済まない、ありがとう。君たちのスタンドを確認したいが、君たちはどうやら今初めてスタンドの存在を知ったようだ。何も危険性はなさそうだ。」

「な、何が何だかわからなかったけど、お役に立てたなら光栄です。」

ことりが困惑した様子で承太郎に礼を言う。

「・・・今気づいたんやけど、なんかこの部屋寒くない?」

とても寒いという訳では無いが、確かに空調が効きすぎている。

「じゃあ空調の温度でも上げましょうか。」

海未が立ち上がりかけるが承太郎が、

「そうか、なら私が温度をあげよう。」

「素晴らしい立ち上がる。」

「いや、いいですよ行かなくて!私が行きますよ!」

海未が止めるが承太郎は歩く。

「なに、席の位置的に私の方が近いんだ。」

「素晴らしい、承太郎は壁についている空調のリモコンの蓋を開こうと手をかける。が、開かない。」

それに加え、承太郎は奇妙なことに気づく。

（・・・!!このリモコンの蓋・・・。開かないだけじゃねえ。『冷たいッ!?!それもかなりの温度の低さだ・・・!』）

その異変にいち早く気づいたのは穂乃果だ。

「承太郎さん!!そのリモコン凍っていますッ!?!」

「そう叫んだ刹那、リモコンから氷が出現し、承太郎を刺すように尖りだした!!」

「パキパキ・・・カキツンッ」

「なっ!?!『スタープラチナ星の白銀』アッ!!!」

「オラアッ!!!」

バギインツ

間一髪で襲ってきた氷をスタープラチナの拳で破る。

「……私の『ありふれた悲しみの果て』を避けるとは、いい反応してるんですね。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

後ろから聞き覚えのある声が聞こえる。

「え、絵里ちゃん？な、何を言っているの？」

「分からないかしら？私がスタンド使いであることを見破られた時点で、貴方を帰す訳には行かないのですよ。空条承太郎さん。」

「絢瀬。何を言っている。まさかお前は、『すでに自分の意思で発現させることが出来る』のか？」

「ふふ。SPW財団から来ただけではありませんわね。流星は最強のスタンド使い。」

「……いつ、俺のことを知っている……？」

「……その言葉は褒め言葉として受け取るが、君はなぜ私を攻撃する。」

「計画に邪魔なのよ。『穂乃果には私のスタンドの影響で発現して貰わないと困るのに』……あなたからスタンドの存在を知らされちゃあ困るというわけ。……まあ見えてる時点で同じなのだけけれど。」

「……」

「空条承太郎。死にたくなければ、ここで口外しないと誓い、引きなさい。」

「済まないが、それは出来ないな。君がスタンドを使う以上は、無力化をし、使い方をレクチャーしてやらねばならんようだ。高坂、少し下がってろ。」

「は、はい!ほら、他のみんなも・・・!?!」

穂乃果がほかの者にも声をかけるが、反応がない。

なぜなら、全員で無気力に陥ったかのようになっているのだ。

「(、これは・・・!?!海未ちゃん!!ことりちゃん!!」

名指しで呼ぶも、変わらず返答がない。

「無駄よ穂乃果。他のみんなには私のエンドオブコモンソロウで『感情をありふれた悲しみに沈め、無力化させているわ。』」

「ツ!?!」

「(・・・この女、何が目的だ!?!平気でほかのメンバーにも手を出している・・・。正気なのか!?!)」

「・・・穂乃果。今だから言うわ。ラブライブ出場は諦めましょう。私たちの夢はここで終わらせるべきよ。」

「!?!」

絵里の口から放たれた言葉。それは、練習、合宿を共にした絵里からは飛び出すとは

思えない言葉だった。

「絵里ちゃん?!何を言ってるの!?!」

「・・・分からなかった? 『スクールアイドルを辞める。』スクールアイドルを辞めて、共にμsをぶち壊そう。そう言ったのよ。」

「・・・ふざけないでっ!!」

「・・・ふざけてなんてないわ。スタンドが発現した以上私たちの運命は変わる。穂乃果。貴方さえ変われば、運命を受け入れることが出来るの!!エンドオブコモンソロウ!!!」

ドツギヤアーンツ

素晴らしい、絵里はスタンドを出し、穂乃果に攻撃しようとする。

穂乃果はスタンドは見えるものの、発現は出来ないのです、どうしようも出来ない!!

「(くっ・・・!高坂までは少し遠い!!) スタープラチナ・ザ・ワールド!!!!!!」

ドウウウンツ

カチツカツチ・・・

「やれやれ・・・。杜王町で時を止めたのが最後か?全く・・・。ひとまず、高坂を助けよう。・・・オラアツ!!」

穂乃果を助けるべく、伸びているエンドオブコモンソロウの右腕を殴る。

ドガアツ!!

「折れはしないが、ある程度怯みはするだろう。・・・『そして時は動き出す。』」

シューウウウウンッ

ドグアッ!!

「ぐあっ!?!」

絵里は右腕に重い衝撃を感じる。

「えっ? な、何が起きたの!?!」

穂乃果が突然絵里が苦しみ出した状況に驚く。

「高坂! 一旦逃げるぞ!!」

「は、ふえっ!?!」

高坂が腰を抜かしているようだ。

しょうがないので肩に担ぐ。

「あ、あと他のみんなも!!」

「・・・悪いが1人だけになるぞ。」

スタンドで運んでもいいが、追いかけてこないとも限らない。

「構いません!! 早く助けてあげてください!!」

「・・・分かった。」

そういい、近くにいたことりの体を抱き抱え、空いている左肩に担ぐ。

「が・・・、逃がさないわ!! コモンソロウ!! 扉を凍らせなさい!!」

カキカキ・・・

パキインツ!!

「やれやれ・・・。壁にしては、『少し薄すぎるぜ』！オラアツ!!」

そういうと、承太郎はスタープラチナを出し、『扉ごと氷をぶち殴った!!』

「ああああ!?! 学校の備品がアアアア!?!」

「悪いな。後でSPW財団にでも、請求しておいてくれ。」

廊下に足を伸ばす。

!!

ツルウーンツ!

なっ!?! 廊下が・・・、氷漬けに!?

「承太郎さん! いまは! 今転んじやうのは絶対ダメです!!」

「ああ! なんとかバランスをつ!!」

スタープラチナで体を支え、そのままスタープラチナに押ししてもらい、スケートの容量で滑る。

「くっ! 待ちなさい!! 飛び出ろ!!」

絢瀬が後ろから叫ぶ。その瞬間、承太郎達のほんの目の前の氷が巨大化しだした!!

しまった．．．!!この距離では『回避できない!!』

「高坂!受け身の準備だ!!」

「え、ことりちゃんは!?!」

「もちろん2人とも抱えるつもりだが、衝撃は計り知れん!!」

うそ．．．!?!計り知れない．．．!?!ここでもしかして．．．。

いやだ!まだ、sで活動したいのに!みんなで踊りたいのに!!

《ホノカ．．．》

．．．え?

《ホノカ。ワタシヲ．．．、ワタシヲヨビナサイ!》

だ、だれ．．．!?!何処にいるの!!

《ズット、ソバニイマス．．．。アナタガ．．．、ワタシヲミエルヨウニナルヒヲ、ズツ

トマツテイマシタ。》

．．．あなたは．．．ひよつとして．．．。

《ソウ。アナタノヲ．．．、マモルモノ．．．。サア．．．、私の名を叫んで!!!》

ドドドドドドドドドド．．．

「高坂．．．?」

《ワタシハアナタトイツシヨ．．．。トリエモナイケド．．．。タタカワナクテハナラナ

「なるほど……。だが、2対1になっただけでも十分だ。高坂。今はお前は自分のそのスタンドの能力を分かるようになるしかない。戦いの中でだ。」

「え!?でもどうやって……。!!」

「……。考え事は良くないわよ!!」

そう考える内に、絵里は容赦なく氷弾を飛ばす。

「どうすればいいのっ……。!!」(この氷……。!溶けてさえくれれば楽なのに!!)」

穂乃果は混乱しそうになりつつ、考えながら、飛んできた氷弾を拳で捉える。その刹那。

シュー……

(高坂のスタンドが氷に触れた瞬間、溶けた：ツ!?『砕けた』のではなく、『溶けた』：ツ!?)

『溶けた……。!』!?な、なんで……。!?これが能力……。なの?」

いや違う。氷を溶かすだけの能力だとしたら、あまりにも陳腐すぎる。……なにか……。こう、高坂らしいスタンドじゃないのか……。?

「ど、どうということなの……。」

《ホノカ……。アナタガ、sノメンバーニヤツテキタコト……。》

ノーブランドガールズが穂乃果の精神に語りかける。

だが、穂乃果はまだ何もわからない。

(私がみんなに……?……そんなこと……。あるかな……。迷惑かけてばかりで、困らせてしか……。)

《ホノカツ!!!》

(えっなに?!もしかして私今スタンドに怒られた?!)

《ソナナコトハドウデモイイノ!!イイ!?アナタノオサナナジミ、『ソノダウミ』を、
ノメンバーニナルヨウニ『導イタ』ノハダレ!?イママデノメンバー……。イヤ!、
ヲ『導イテキタ』ノハアナタ!!サア!ソノチカラヲ!!サラニトキハナツノデス!!》
S S

「……おい、高坂。」

承太郎に声をかけられ、穂乃果はハツとする。……そして、不敵な笑みを浮かべる。

ニヤリ

「『肩書きのない少女』……。そう……。だね。私は……。皆を導いてきた。そんな自

覚はないけど……。きつとそうなんだと思う。そうであつたらいいなあ。」

「だんだん自信無くなつてきてるぞ。」

「……。ノーブランドガールズ。あなたの能力は……。『導き。』相手を……。『導かせる能力』なんだね。」

「!!!」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:

2話 肩書きのない少女

ノープランドガールズ
ー肩書きのない少女。

μ s のリーダー、高坂穂乃果に発現したスタンド。触れたモノや人を『導く』能力を持つ。

「高坂。導くってどういうことだ・・・?」

「私のノープランドガールズが触れたものや人に対し、『今すべきことを導いて』やれるんです。」

「・・・まさか、ある程度指示を出す、ということか?」

「指示を出しても対象が動かなくては意味ありません。私のは、『そうさせる』んです。導いた方向に、『必ず動く』ようになるんです。」

・・・必ず動くように導けるスタンド・・・。

それでいて分厚い氷の壁をぶち破れる破壊力もある。・・・聞くだけで恐ろしいスタンドだな。

「・・・その意気よ穂乃果。そう、その力で私に抵抗してみなさい!!」

「・・・いいや絵里ちゃん。抵抗もしないし、私は貴方に『一切の攻撃をしない』ッ!」

ドンッ

「馬鹿を言わないで!!私のありふれた悲しみの果ての前には攻撃を出さなければ、あなたは身を滅ぼすだけよ!」

「そんなことないよ。じゃあ絵里ちゃん。ここで宣言してあげる。私は絵里ちゃんを『触れただけで撃退する』と宣言するよっ!!」

「ふふっ……。ハハハハハッ!!面白いわ穂乃果っ!やってみなさい!!」

穂乃果は振り返り、承太郎を見る。

そして、穂乃果は苦笑いで

「承太郎さん。スタンドでの戦い方……。教えてくれませんか?」

そう。触れずに倒す、とは言ったがスタンドの性質も何もわからないのだ。能力だけだ。

「……。やれやれだぜ……。大見栄を張るな。何もわからないし、君は元々女子校生で戦いの技術もないだろう。」

「はい……。」

「……。まず大前提のルールとして、スタンドはスタンド使いにしか見えない。これはわかっていると思う。そして、スタンドでのバトルで注意すべきことは、『スタンドはスタンドでしか攻撃できない』という事だ。」

「スタンドはスタンドで叩け．．．ってことですか？」

「ああ。そういう事だ。あと、スタンドが攻撃を受けると、『スタンドが攻撃を受けた箇所にも自分もダメージを受ける』からな。さっき俺が絢瀬の攻撃していないのにあいつが怯んだ理由は、それが原因だ。」

（．．．やはりあの男、なにかしていたようね。しかし、能力は読めない．．．。仕方ないけど、あの男はまだ狙うべきではないわね。）

「高坂。奴はきつと先ず君を狙ってくるだろう。．．．ギリギリまで『耐えろ。』」

「．．．はい。」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ．．．

「穂乃果．．．行くわよっ!!」 ダッ

絵里は凍らせた廊下を利用して、滑るようにこちらに近づいてくる。

そして、目の前で飛び、穂乃果に拳を向けてきた!!

「今だっ!!」

隙を見つけ、そこを叩けたと思った穂乃果。しかし、

「まだだっ!!高坂ッ!!」

承太郎が叫ぶ。

「えっ!?!」

「ふふ……、勝機は私にあったようね!!」

ガキインツ!!

拳同士がぶつかり合い、押し合いの状態になる。・・・が、ノーブランドガールズの拳が凍り出す!!

「ツ……!!」

「忘れたの!?!私のエンドオブコモンソロウは対象をありふれた悲しみの果てに沈めて、凍てつかせることも出来るのよ!拳を封じられたあなたに、果たして抵抗ができるのかしら!?!」

「高坂ツ……がつ!?(くつ、あのアマ……俺の足までしっかりと凍らせてやがるツ……スタープラチナで壊してもいいが……)」

「空条承太郎。氷を壊すのはやめなさい。」

「……。やれやれ、仕込んでやがるな。」

「もちろん。それを壊したら、あなたにさらに氷が広がるわ。」

「……絵里ちゃん。あなたも、もう……、忘れてしまったの?」

「……え?」

「私がさつき、絵里ちゃんの能力を失念してたように、絵里ちゃんも私の能力を忘れたの?」

「な、何を馬鹿なことを……。」シユール……

そう呟いた刹那、何かが音を立てる。

「この音……。」

「気になるなら、ぶつかりあつてる拳を見てご覧。」

「なっ!?!と、『溶けているっ!?!』」

「言つたでしょ? 私の能力は『触れたモノや人を導かせる能力』だつて。さつき氷弾を溶けるように導いたように……、一ノブランドガールズの腕を纏っている氷も溶けるように導いた!!……そして……。」

ドンッ

穂乃果は絵里の身体を押す。

「あなたも、導くよ。絵里ちゃん。『ここは一旦、退却しよう。』絵里ちゃん、あなたは……そうするべきだよ。」

「くっ……! バカなっ!?! (あ、頭の中で、如何に2人を倒そうかという計画が、『全て退却するという思考に塗り替えられているッ』!!くっ!!しっ、従わないと……!! 『脳に直接ダメージが来る可能性があるッ! それぐらいのやばさがひしひしと伝わって来るっ!』」

ザアツ

「ふふ……穂乃果。今回はしてやられたみたいね。こう能力にやられちゃ、私もどうしようも出来ないわ。……御二方、御機嫌よう。」

そう言い、能力による行動とは思えないほど華麗に絵里は消えていった。

「か、勝ったのかな……。ふうー……。つ、疲れた……。」

「やれやれ、あのタイミングは時期尚早にも見えたが……。どうやら君のそのスタンドでは、ある程度タイミングは関係ないのかもしれないな。」

「……あつそうだ！ことりちゃん！大丈夫!!？」

承太郎が背負っていることりをゆする。

「う、うーん……。？」

「よ、良かった！目を覚ましたんだね!!」

「う……。うえっ!!承太郎さん!!なんで……。!!」

「え？何も覚えてないの？」

「……なにか、周りが急に寒くなって、それ以降……。記憶無くて……。」

ことりは悲しみの果てに沈められて、無力化されてからなにも覚えていないようだった。

穂乃果がさつきまでの状況を説明する。

「……絵里ちゃんが……。」

「嘘だと思いかもしれないが、本当だ。私や高坂がボロボロなのも、それが原因といえ原因だな。」

「えへへ……、部室で着替えなきゃ……。」

「……そうだ……。私、承太郎さんに謝らないといけないことがあるんです。」

「……?どうした、南。」

「さつき、『スタンドなんて知らない』って言いましたけど、ほんとは『知ってたんです』。発現した事も、能力もを」バンツ

「!!」

「……なんで……、黙ってたの?」

「……あまり、他の人が持つてるものじゃないから……。」

「まあ、それはそうだな。スタンドはスタンド使いにしか見えない。一般人には見えなからおいそれと見せていたら変人扱いされかねんからな。南の反応は正しいものだ。相手がスタンド使いだったとしても、自分の能力など見せたくないしな。」

「手。ですが、私を助けてくれたってことは、『信用』出来ますから。私のスタンド、承太郎さんに見せてもいいと思います。」

「そういい、ことりは自分のスタンドを発現させた。」

穂乃果のスタンドが鮮やかなオレンジ色をしているのなら、ことりのスタンドは色はグレーではあるものの、どこか明るい印象のある色合いをしたスタンドだった。

「不可思議なる境……。これがわたしのスタンド。私が指定した境目に入った人間に波動砲を放ち、私のおやつにするの。まあ、おやつにするって言うのは当たった人間からエネルギーを奪うってことなんだけどね。」

（……なんでこうも、この2人は破壊力が凄そうなスタンドなんだろうか。）

そんなことを考えつつ、承太郎は再び部屋に足を動かす。

「2人とも、そろそろ部屋に戻ろうか。ほかのメンバーの行方が気になる。絢瀬の影響でスタンドが発現しているかもしれない。」

「あ、はい！」

「……あ、そうだ承太郎さん！」

「……なんだ、高坂。」

「さつきから気になってたんですけど、その苗字呼び、やめましょう!! 私たちのことは下の名前で呼んでください!!」

穂乃果からの提案。

「……私としては苗字でいいんだが……。」

「私たちが落ち着かないんです!! お願いします!!」

「・・・やれやれだぜ。行くぞ、穂乃果、ことり。」

「はいー!」

ー部室ー

承太郎達は部室の手前に行く。

「・・・扉、直しもなくちやあならねえな。」

「さつきぶつ壊してましたからねー・・・。」

「やれやれ、まさか来て初日にこうなるとは、思いもしなかったぜ。」

「あはは・・・。あれ?」

扉の前に来た時、ことりが首を傾げる。

「穂乃果ちゃん、承太郎さんの話だと承太郎さんと穂乃果ちゃんは扉を『吹っ飛ばして』廊下に逃げたんだよね?」

「う、うん。」

「じゃあ、なんで・・・。既にドアが・・・『治っているの』ツ・・・!?!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「・・・こいつは・・・、なにかやばいぞ。」

「穂乃果、ことり。・・・そして・・・、空条承太郎。見つけましたよ・・・。」

「あつ!海未ちゃん!無事だったんだね!」

「ええ。なんともありませんよ。」

「良かったa」

「二人ともツ、それ以上近づくなっ!!!」

「えっ」

ズオンツ!!

「あれ・・・?穂乃果・・・ちゃん?」

「・・・穂乃果は、私のスタンドで呑み込ませていただきました。大丈夫です、死んでは
いません。なぜなら・・・。始末するときはあなたがたをいつせいに始末するからですツ
!!!」

t o b e c o n t i n u e d . . .

3話 不可思議なる境と未来の花

「海末ちゃん・・・？穂乃果ちゃんは・・・、どこに・・・行つたの？」

「・・・話を聞いていなかったのですか、ことり。呑み込んだ・・・。そう言つたんです。」

「・・・なんでそんなことをするの・・・！」

「・・・敵だから・・・としかいいようがありません。」

（・・・やはり絢瀬の時もそうだったが、こういうふう^にに立ち^はだかつてきた時、奴らには謎の殺気がある。気を抜いたら・・・『殺られる』だろうな。）

「ことり、さつきも言つたが奴には迂闊に近づくな。相手のスタンドがわからない以上、あまり近寄るのは正しい判断じゃない。」

「ええ、ですから私達も、近づけないようにしましょう!!^{ワンダーゾーン}不可思議なる境ツ!!」

「先程も見たが、それが君のスタンドか？」

「ええ。そしてこのワンダーゾーンは・・・。ワンダーゾーン! 範囲を指定して!!」

そういうと、ワンダーゾーンは指先から光線のようなものを放ち、廊下の壁から反対側の壁まで仕切るように線を引いた!!

「・・・なるほど、コレが所謂、君の言う『指定する範囲』か？」

「その通りです承太郎さん。だから……海未ちゃん、『その線の内側に……入らないように』ね。その線の内側に入れば、ことりのおやつにちやうからね。」

「……ふふ……、牽制のし合い……ですね。しかしこれでは平行線ですよ？」

「もちろん。平行線になるね。……でもそれは……、『私と海未ちゃんが1vs1の時だけだよ。』」

「……なっ!!」

「自我がはつきりしない状態でのスタンドを出現させるのは非常に危険だからな。……園田。お前をすこし沈静化させてもらう。」

「……ふふ、どうするのですか？先程も言ったように牽制のし合い。それはあなたも同じことです。」

「……ならば、『こういう手もあるな』。」

そういうと、承太郎はスタープラチナの拳についている銀色の球を発射したっ！だが、海未は顔色一つ変えずに

「……飛び道具……ですか。でしたら、『私のスタンドの方が強い。』フューチャー・フラワー未来の花ツ
！」

フューチャー・フラワー。そう自分のスタンド名を叫んだ海未は自分の目の前に謎のホールを作る。

そして、スタープラチナのライフル弾を飲み込む。

「・・・なるほど。君のスタンドはホールに飲み込むタイプか。」

「ええ。そんな感じですよ。まあ、飲み込んだもののエネルギーが大きければ大きいほど、長くは保持できません。・・・それに・・・」

海未がその続きを言おうとする

「飲み込んだもののエネルギーが小さくとも、ずっとホールの中に飲み込むことはできないって感じか？」

「・・・そこまでもう見破ってるんですね。・・・まだ私のスタンドは未完成みたいです。」

ドサアツ

そう海未が呟くと後ろで何かが落ちる音がした。

「ツ！穂乃果ちゃんっ!？」

「・・・なるほど。呑み込んでも、暫くすれば『呑み込んだ場所』から戻されるといわけか。」

「ええ。・・・あなたがたと戦って勝利することで、フューチャー・フラワーを・・・、私のスタンドを成長させる必要があります。」

「・・・やれやれ。成長のさせ方ってのも・・・、重要なものだけ。そもそもスタンドってのは『自分自身』だ。親友に手を出して、果たして『自分が成長できると思うか?』」

「……煩いです。……『あの方』からの暗示に……!間違いがある訳ありません!!」

虚ろな目で園田が叫ぶ。

だが……、

「……あの方……だと?誰の事だ?ただ、操られていることはわかったな。……絢瀬も同じと見ていいだろう。」

「ことり、今の言動でわかったな。完全に操られていると見て間違いないだろう。」

「……はっ、はい……。」

「……しかし、あのホールは厄介だ。私が先に出よう。……『スタープラチナ・ザ・ワールド』ッ!」

ドウウウウンツ……

カチツ、カッチ……

「……あまり多用しすぎると俺の体に来るが……。『前ほど負担はない』みたいだな。……俺も成長しているといえはしているのかもな。……『そして時は動き出す。』」

スウウウウツ!

「……っ!?!なっ!?!いつの間に後ろにっ!?!」

「少しだけ『押させて』もらうぜ。」

トンッ

「……ぐっ……!! (まずい!……このままでは『ことりの空間』に入ってしまうっ!)」

ザッ……

「……私の境に入ったね……! 『ことりのおやつにするよっ……!』」

その刹那、ことりのワンダーゾーンが、波動砲を発射した!

「……甘いですよ! フューチャー・フラワーツ!!」

だが、園田のフューチャー・フラワーが作り出したホールに、その波動砲ごと飲み込まれてしまう。

「なっ……!!」

「……言ったでしょう。飛び道具でしたら私の方が強い、と。」

「……そんな……!」

(……ですが、ことりの不可思議なる境の波動砲は……、『エネルギーが強大……』あまり保持は出来ませんね……。)

ことりが、どう反撃しようか考えていたその時。

「……大丈夫だ。」

「……え?」

海末の背後にいた人物、そう、空条承太郎だ。

空条承太郎が呟いた。

「……だ、大丈夫って、飛び道具も効かない、スタンドで攻撃した所で本体ごと飲み込まれるのは目に見えているじゃ……!」

「ことり。スタンドでのバトルは自分のスタンド能力を把握することも大事だが、……本当に大事なものは『そこだけじゃあねえんだぜ。』」

「そこだけじゃ……、ない……?」

「ふ……、なにを……。あなたがたもホールに飲み込んだ後、気絶させてゆっくり始末してあげま……」

「園田。さっき、君も言っていたとおり、君のスタンドは『まだ未完成だ。』……能力も完全じゃあねえ。……君のその異空間に呑み込む能力も、呑み込むだけで始末は出来ねえし、『呑み込めてせいぜい1, 2分』……と言ったところか?」

「つ!!? (……この男……、『あの一瞬で私のスタンドの弱点を見抜いた!?!』)」

承太郎は続ける。

「しかも君のその様子を見る限り、『呑み込んだ状態を保持するのにも相当な集中力を要する』ようだな。……あまり無理はしない方がいい。このあとの反動も大きくなるぞ。」

「……何を抜かすかと思えば、情けですか!?!今、窮地に立たされてるのはあなたがたの

方です!!私が圧倒的有利!先程ことりが言った通り、飛び道具も、直接攻撃も、全てこのホールで飲み込める!ここになんの欠点が!

「・・・君がさつき言ったんだ。『長くは異空間に飲み込むことはできない』・・・と。そして、さつき私が予測でせいぜい1、2分だと言った・・・。今、何分経ったか、わかるか?」

海未は承太郎とこりの行動を時間に当て嵌め、振り返る。もちろん、いつでも攻撃されても反応できる間合いでだ。・・・だが、その対応が無意味だとわかる結論にたどり着く。

(・・・まさか・・・!!『アレ』を狙って・・・!!いや・・・!!『アレ』だけならば、撃たれたあとでも反応できる・・・!)

「・・・ふふ、あなたが何を考えているかは把握済みです。・・・ですが・・・。」

そう眩いた瞬間、承太郎のライフル弾を呑み込んだホールが再び出現し、海未に向かつていく!

「この程度ならホールを使わずとも躲すことは可能!!」

海未はこれ avoidance、そして、そのまま反撃に移ろうと考える。完璧だ。・・・そんな海未に、空条承太郎は帽子の影から不敵な笑みを浮かべた。

「・・・ああ、避けられるだろうな。・・・だが、『君のいる場所はこりの境の内側』だ

ぜ？」

「!!まさかつ!!」

「そう・・・!そのライフル弾ごと、囷・・・!本命は避けたところを撃つ!!」

ズドオツ!!

「ふふ・・・!!甘いですよことり・・・ッ!!」

(がっ・・・ダメだ!!ここでもう一つ飲み込んでしまうと・・・!さっきの波動砲が解放されてしまうっ!!・・・いや、・・・この角度なら『当たることはないっ!』)

「構わない!フューチャー・フラワー!飲み込みなさいっ!」

シユウウウン・・・

フューチャー・フラワーが波動砲を飲み込む。だが、その直後最初に飲み込んだ波動砲が放たれる!!

「ツ!やはり・・・『波動砲は少し右にズレている!』私に当たることはないっ!」

勝利を確信した海未。だが、

ドゴオンツ!!!

「ゴハツアツ!!?!!な・・・、なぜ・・・!?『波動砲がカーブして・・・!?』」

ドドドドドドドド・・・

「海未ちゃん・・・、忘れたの?その線の内側は・・・『ことりの範囲』だよ?範囲内で

あれば、私の波動砲は『自由に操れる。』」

「・・・2度のブラフ、勝ちが目前からの慢心、そして、未成長のスタンドを把握出来ず、敵に読まれてしまったことが・・・、『君の敗因だ。』」

「・・・ふふ・・・、『彼を知り己を知れば』・・・ということですか・・・。未完成のスタンドというのも・・・、不自由ですね・・・。」

ドサツ・・・

「海未ちゃん!!」

「安心しろ、気を失っただけだ。穂乃果と一緒に部室で手当しよう。」

「は、はい!・・・みんなも、無事だといいですけど・・・。」

t o b e c o n t i n u e d ..

4話 愛しき挑戦者《ダーリン・チャレンジャー》

承太郎とことりは2人を抱え、部室のドアノブに手をかける。

「ことり。もしかしたらこの先に、園田と同じように操られてしまった娘達もいるかもしれない。その時はこの場を走って逃げるぞ。いいな。」

「は、はい……。」

承太郎はドアノブを回す。先程開けた時とは比べ物にならないほどに重く感じる。それほど張りつめているという事だ。

「……誰も、いない……。」

「みんな、何処に行つたんだろう……。」

「……あまり詮索するのはよそう。先に穂乃果と園田の手当をするぞ。」

「は、はいっ!」

――
簡易ではあるが、手当を終え、承太郎は時間を見る。

(3時半……か。)

「どうかしましたか?」

「いや、絢瀬に出会ったのが1時前、そして園田と戦ったのが2時半前くらいとすると、この調子だと全員は見つからないな。」

あまり時間は掛けられない。時間をかけず、9人全員、スタンドの確認をしなくてはならない。

「それでしたら、明日も来たらいいじゃないですか。」

「・・・構わないのか？」

「私達は今、テスト期間中ですから、午前中に襲ってくることは無いと思います。」

「・・・大変な時期に来てしまったな。済まなかった。」

「いえいえ。・・・どちらにしろ、こうなつてたと思いますから。」

「・・・かもしれないな。」

そんなことを話していると、穂乃果と海未が目を覚ました。

「む、気がついたか？」

「はっ!?こ、ここは・・・。あ、承太郎さん・・・。」

「大丈夫だ。園田も無事だぞ。」

「そ、そうだ!海未ちゃん!大丈夫!?!」

「・・・うう・・・、はっ!?わ、私は一体・・・。」

「・・・何も覚えてないの?」

「ことりが様子が少し変な海未に話す。

「え、ええ……。先程までの記憶が少し曖昧で……。」

「おそらく君は操られていたのだろう。その状態で、スタンドを使って、私たちと交戦したよ。」

「そうですか……。でも、何故かわかるんです。自分のスタンドのことが。」

「どうやら、さっきの戦いで得たスタンドの知識は普通に体に叩き込まれてるみたいだな。その様子だと、発現させることも出来そうだな。やってみたらどうだ？」

「は、はい……。『未来の花《フューチャー・フラワー》』ッ！」

ズアオツ!!

「あ……。問題は無いみたいです。」

ふむ、スタンドも先程のような痺気も感じられない。

精神に酷い乱れがないという事だ。

「海未ちゃん、じゃあ正気に戻ったんだね!？」

「え、ええ……。そういうことなのかも知れませんがね。記憶が曖昧なのではつきりとは言えませんが」

「よかったアアアああああ!!」

その言葉を聞いたことりと穂乃果は海未に思い切り抱きつく。

「うわわっ!? た、助けてください空条さあ〜ん．．．!」

困った顔で承太郎に助けを求める海未。

「ふっ．．．。やれやれだぜ。」

「あ、海未ちゃんも承太郎さんのこと空条さんじゃなくて承太郎さんって呼べばいいじゃん!」

「えっ。」

「はっ?」

「さっきも言ったけど、みんなを元に戻す為にも、距離感だけでも近い方がいいよ!」

「い、いいんですか?」

「私の呼び方は何でも構わないが．．．。(またこのやりとりか．．．。)」

「じゃ、じゃあ．．．、それで。」

(やれやれ、相変わらずよくわからんな、女というものは。)

お茶を入れてしばらく休憩していた頃、穂乃果が口を開く。

「そういえば、なんで扉直っていたんだろ．．．。」

「恐らく、私のフューチャー・フラワーの能力かと。」

「ん? そうなのか?」

承太郎は、海未からの思いがけない発言を聞き返す。

海未はそれに答える。

「ええ。私のあのホール、厳密に言うると、『未来へ送る』と言った方が正しいんです。どうやらホール飲み込んで、そのままホール内に保持し、未来に送る際にある程度元の姿に戻して未来に送るようなんです。」

「なるほど、上手く活用すれば治療にも使えそうだな。」

「まあ、あまりにも原型をとどめていかなかったら、直せないようですが……。」

「構わない。第一にダメージを受けないことを優先するからな。みんなも、それは頭に置いておいてくれ。」

承太郎が、念を押すように言う。

彼女たちはスタンド使いの前に『スクールアイドル』だ。あまり怪我させる訳には行かない。

「……あれ？承太郎さん、指、切れてますよ。」

「……？」

そうことりから指摘され、承太郎は自分の両手を見る。

よく見ると右手の中指の第二関節あたりから血が出ている。

「恐らく、1番最初、リモコンを操作する際に絢瀬からの氷の攻撃を拳で叩いたのが原因

だろう。……すぐに止まりそうだが、まあ、絆創膏を貼っておくか。」

「承太郎さん、はい、救急箱。」

穂乃果が、救急箱を持ってきてくれたので、箱を開く。

「……ん、絆創膏がない……。」

「おや、切らしているみたいですね。保健室に取りに行きましようか。」

「そういい、海末が立ち上がる。」

「私も、自分のはる分だけでも貰いに行くか……。」

「私たち二人は待つてるから、気をつけてね。」

「ああ、二人もここに敵が来るかもしれない。ここも気をつけるんだぞ。」

「分かってますって！任せてください！」

……穂乃果はなんか心配になるな。

「ことりと穂乃果は部屋に残り、海末と承太郎で保健室に絆創膏を取りに行くこととなった。」

「さて、承太郎さんは部屋の前でお待ちいただけますか？」

「む……、何故だ？」

「突然部外者の人が保健室に来たら何事かと思われるかもしれませんがね。補充用の

絆創膏と承太郎さんが今使う絆創膏は私がもらってきたので。」

「分かった。誰がいるかわからないから、気をつける。」

「はい。」

「ああ。何かあったら、直ぐに声を上げるんだぞ。」

「分かりました。」

海未はノックをし、慎重に保健室の扉を開く。

「……あら、海未。どうしたの？」

「真姫！無事だったんですね！」

「ええ、お陰様でね。海未も無事？」

「ええ。承太郎さんに助けて頂いて……。そうだ、真姫はここに私が来る前に誰か来ましたか？」

「いいえ、誰も来ていないわ。海未が初めてよ。……空条さんはいるの？」

「扉の前にはいます。こうなってしまったとはいえ、承太郎さんは部外者ですし、部外者が保健室に入ると何事かと思われてしまうと思って。」

すると、真姫が顎に手を当て、考える。

そして、

「……まあ、入っても構わないんじゃない？後で何かしら言い訳はできるわよ。今日は

先生いないし。(・・・それに、聞きたいこともあるものね。)

「そ、そうですかね・・・。」

「海未、西木野。絆創膏はこれか？」

「なんでもう既に入っちゃってるんですか!?(のよう?)」

「いや、なかなか絆創膏を取ってこないから私が取っても構わないかと思って・・・。」

「混乱を避けるためにやったのに意味がないじゃないですか・・・。」

承太郎は、絆創膏を一枚、そして救急箱の補充用の絆創膏の箱を1箱取り出す。そして傷口が完璧に埋まるように絆創膏を張りつけた。

「さて、承太郎さん、戻りましょうか。真姫も一緒に部屋に。穂乃果とことりも待っていますし。」

「ええ・・・。でもそのまえに、・・・聞きたいことがあるわ。空条さん。」

「そういい、真姫は承太郎になにか突きつける。」

「ヒヤリとした雰囲気。・・・刃物だ。」

「・・・それが君のスタンドか？」

「そうよ。空条さんの言っていたスタンド。エリーがあんな風になった瞬間に私にも発現したわ。これも含めて、知っていることを話してちょうだい。」

「・・・いいだろう。だが、私のわかっている範囲迄になるが・・・。」

「ええ、構わないわ。」

そう答え、真姫は自分のスタンドを引っこめる。

「単刀直入に聞くわ。．．．今回の騒動、あなたが原因かしら？」

「ちよ．．．、真姫．．．！」

「海未、失礼なのは承知済みよ。だけどこれは重要なことよ。」

まあ有り得る質問だ。

承太郎は顔色一つ変えず、首を横に振り、静かに否定する。

「．．．そんな訳はない。自己紹介の時に言った通り私はSPW財団の者で、この学校に『スタンド使いが現れた』という情報を掴んでやってきたんだ。」

「．．．ま、分かり切ってたことだし、余計な詮索だったわね。悪かったわ。．．．あともう1つ。何故こうなったかは分かるかしら？」

「．．．正直なところ、わからない。予想としては2つある。」

「聞かせてもらおうかしら。」

「．．．まず、私が1番目に考えたのは『D I O』という男が復活した影響．．．だ。」

「D I O．．．？」

承太郎はD I Oの説明を手短かにすませる。

そして、自分のスタープラチナが発現したのはDIOが復活したことによるものだと説明する。

「・・・なるほど。・・・だとしたら、少し『時期が遅すぎる』んじゃない?」

「その通りだ。私が発現したのが13年前。君たちのもこれによるものだとしたら、あまりにも差が大きすぎる。」

3人でこの説はないと決める。

承太郎は考えたくはなかったが、『1番有り得る説』を切り出す。

「・・・これが最も有り得るのだが、『矢』・・・に触れてしまった場合だ。」

「・・・矢?」

真姫はその単語を聞き、首を傾げる。

「ああ。・・・その矢に貫かれたり、傷をつけられると、『その人間に適正があつた場合、スタンドが発現』するんだ。」

「・・・まさか、これのことですか。」

そう言うのと、海未がポケットから出したのは砕けてはいるが、紛れもなく矢の先の破片だ。

「ッ!?未だ日本に存在するというのか・・・!?いや、まあそれは関係ない。・・・海未、これどこにあつた?」

「私の机の中に……。中から教科書を取り出しそうとした時に、何かに引っかかれた感覚がして、取り出したらこれが……。」

一つ気がかりなのは、彼女達がスタンドを得る際に体調を崩さなかったかだ。矢で発現する場合は前例はないが、高熱を発してもおかしくはない。

「海未、それに引っかかれたのがスタンドの発現の原因で間違いない。だが、その後体調を崩したりはしなかったか？」

「いえ、特に……。この矢を見つけたのが確か、ちょうど一週間前ですから、その間に体調を崩したりはしませんでしたね。」

その海未の発言に真姫も同意する。

「私も海未と同時期ぐらいだわ。おそらく、μ sのメンバーはほぼ同時期にこの矢に触れたと見て間違いないわね。」

スタンドが発現する際に発熱したり、体に異常が出ないということは、かなりの精神力と身体力の持ち主だということか。……トツプを本気で目指す彼女達ならばどちらも得ていてもおかしくはない……か。

すると、真姫が突然、海未を凝視しました。

「ま、真姫？どうかしましたか……？」

「……海未、アンタかなり体が寝れてるみたいよ。さつきまでの戦いで相当体力を消

費していたみたいね。」

「・・・そう言えばさつきから、かなりの倦怠感が体を包んでいましたが・・・まあ、これくらいなら・・・。」

その言葉を聞き、承太郎は横に首をふる。

「いや、これくらいと言って侮るべきではない。海未のスタンドは能力的にもエネルギーをかなり使うと見ていいだろう。多用は避けるべきだな。」

「さつき言ったことは正しいと見ていいわね。ま、この程度ならば私の能力でなんとかなりそうだね。・・・少し痛いけど、我慢して。」

「え、ええ。」

「・・・『愛しき挑戦者』！」

ダーリン・チャレンジャー

真姫が己のスタンド名を言う。

すると、真姫の右手に病院で手術の際に使用する道具のメスに近い形の銀色に光った刃物型のスタンドが現れた。

「・・・真姫のスタンドは人型ではないのですね。」

「みたいね。私も、空条さんのスタンドを見て、人型もあるのだとわかったくらいよ。」
「スタンドの形は色々ある。基本的には人型だが、例えば拳銃のような形だったり、影がスタンドだったという敵もいた。私が高校生の時、特殊な体験をして、様々な敵と戦っ

た時は戦闘機型のスタンドもいたよ。」

真姫と海未はスタンドと言っても多種多様な形があると知る。

そして、真姫は自分のスタンド、愛しき挑戦者ダーリン・チャレンジャーの能力を2人に見せ付ける。

「さっきも言ったけど、少し痛いから。我慢して。」

真姫は海未の制服の上着を脱がせ、カッターシャツの袖をまくり、腕にスタンドの刃を軽く押し当て、ゆっくりと縦に動かす。

「ぐっ……う……!」

「もう少しの辛抱よ。」

その状態を維持し、十秒くらい経ったところで刃を離す。

すると、刃を離れた途端、切り傷が直ぐになくなる。

「……あれ?さっきまで体を包んでた重い倦怠感が……。」

「消えたでしょ?私のスタンドは斬った相手の体調を変化させるの。体調がよければ自然治癒力も上がるし、健康状態も良くなる。身体能力も多少アップするわ。でも、逆に体調を悪くさせることも出来る。人間にとってコンディションっていうのはとても重要なものなの。」

「……凄いですね、この能力は。」

「敵にあった時は間合いに気をつけなければならぬな。」

承太郎が戦闘面での注意点を指摘する。

「ええ。私のスタンドはこのメスだけだから、攻撃する分には私自身で動かなくちゃならないから。体に負担にならない程度に、自分で自分の体を切る必要もあるかもしれないわね。」

海未がその言葉を聞き、ゾツとする。

「・・・いい能力かもしれませんが、あまりその方法はしないでくださいね。」

「もちろんよ。・・・どうやら持ち主の私には効果が薄いみたいだし。でもま、しないよ
りマシかもね。」

「自分に使うなら、使い所は考えなくてはならないな。」

「・・・そうね。・・・空条さん。どうやら私はあなたを疑いすぎていたみたい。ごめんなさい。」

真姫は承太郎に対する非礼を詫びる。

「いや、気にするな。君がそう考えていたのも、無理はない。」

「そう、ありがとう。・・・そういえば、穂乃果とことりの手当は終わったの?」

「応急処置だけです。・・・。」

「じゃあ一度部屋に戻りましよ。他のみんなも気になるけど、今は今いるメンバーの無事を確保しないとね。」

「そういい、真姫は先程のふたりの応急処置に使った道具よりも高度なものを、保健室から取り出し、承太郎と海未に部屋に一緒に来るように言った。」

「・・・しかし、西木野と戦うことにならなくてよかった。」

「え、どうしてですか？」

「戦うとなっていたら、あれで切られたらさすがに負けていたかもしれない。体調と言うのは所謂自分の身体の話だ。その調子を操られるとなっては・・・どうしようも出来んからな。」

海未が先程ゾツとした理由。自分で海未はそれが少しわかったかもしれない。それは、真姫が自分の身体能力を上げるために自傷するかもしれないという危険性ではなく、敵としてきた時に、『自分の体』が敵になるかもしれないということからの恐怖心だったのか。

「・・・ええ。本当にそう思います。」

「どうしたの二人とも。早く部屋に戻るわよ。」

真姫は2人のそんな心配を知る由もなく行動を急かす。

彼女が操られることは自我の強い彼女ではそうそう無いだろう。

海未はそう考えた。

それは、真姫がスタンドを得たとしても無茶をしないという信用からだった。

「ええ。」

「そうだな。穂乃果とことりの様子も気になる。私達もそろそろ部室に戻るとしよう。」

4人目の仲間は西木野真姫。彼女は海未や絵里のように正気を失っている襲つてきたりするようなにはならず、承太郎のように独自に調べていたようだ。

しかしこれで、やはりこのスタンド使いとなつたスクールアイドルを『何者かが操っている』という可能性がかなり強まつた。そしてその犯人の手がかりは今のところない・・・くまなく調査するしか無さそうだ。

t o b e c o n t i n u e d . . .

EX話 バレンタインという文化

「さて、そろそろ行ってくるよ。」

「うん！パパ、行つてらっしゃい！」

「行つてらっしゃいパパ。」

娘と嫁の見送りを受け出発する。

今日は元々音ノ木坂学院に向かう予定はなかったのだが、μ_sの方から連絡があり、急遽向かうことになったのだ。

(しかし、急ぎの用など何かあっただろうか？取り急ぐようなことは無かった気がするが……)

何かまずいことでもしたのか考えながら、音ノ木坂に向かっていたが、結局答えが見つからず到着してしまった。

なにもわからないまま扉を開ける。すると、

「ハッピーバレンタイン!!」

とメンバー9人の声が聞こえた。

「……あ、そうか、今日はバレンタインか……。」

「え!? 承太郎さん忘れてたの!？」

「ああ・・・、最近論文で詰めていたから曜日感覚がなくてな・・・。」

「休んだ方がよろしいのでは・・・。娘さんに怒られてしまいますよ。」

ぐう・・・、海未に娘のことを怒られてしまった・・・。

その通りだな・・・。仕事は減らさなくては・・・。

すると穂乃果が

「まあまあ承太郎さん。今日はバレンタインパーティーと称してみんなでパーティーと楽しむ

ことにしたんです!!」

「でも、その前にまずは承太郎さんお待ちかねのチョコやなく?」

チョコ・・・。久しく食べるな・・・。

「ここにある好きなチョコから食べてくださいね!」

ことりが机の上にある多種多様のチョコを指す。

「そういう事だったのか・・・。」

「まあ、全部承太郎さんのために作ったんだから、ちゃんと全部食べなさいよ。」

にこから命令が下る。

・・・この量はしんどいな。

まず、一番手前にあったチョコクラランチを手取る。

「あ、そのチョコは私と海未ちゃんで作ったチョコですね。」

「ことりが自分たちで作ったチョコの紹介をする。」

「ふむ、サクサクとした食感で美味しい。」

「っ！やったあ！やりましたことり！美味しいと言っていたきました！」

「やったね！海未ちゃん！」

「次は、このトリユフか。」

「私たちのは美味しいわよ！」

「味わって食বেনさいよ。」

「にこと真姫が作ったようだ。」

「食べたら、中からトロリと溶けたチョコが溢れ、とても美味しかった。」

「とても美味しいが、にこも真姫もこんなことも出来たんだな。」

「ま、アイドルとしてはとーぜんよね！」

「別に、少しかじってただけよ。」

「次は・・・。なんだこれ!?!おにぎり!?!」

「あ、いや大福か・・・。」

「私の家の大福の生地の中にチョコを入れたんだ!!」

「少し見た目はおにぎりっぽいですけど．．．。」

「かよちゃんと私と穂乃果ちゃんの3人で作った傑作にやー！」

食べてみたが普通に美味しかった。

考えたらこれ普通にチョコ大福だよな。

そして二個目をかじったその時。

「かじったらチョコじゃなくてラーメンだったんだが．．．。」

なんてことをしてくれたんだッ！

「もー、だから凜ちゃんそこはいちごだって言ったじゃん！」

「それじゃ普通すぎるにやー！」

「お米入れるのが1番．．．。」

「それは一番ない。」

「ふええ．．．。」

いちごでいいだろ普通に．．．。

さて、最後に希と絵里のチョコだな。

「私達は普通にチョコを作ってみました。」

「みんなみたいに捻ってはないけど、美味しいと思いますよ。」

そう言われ、1つ口に入れる。

シンプルだが味わい深い、美味しいチョコレートだ。

「間違っていたら済まないが、洋酒入っているか？」

「お、気付きはったんですね。ええ、正解です！」

「この前、ロシアのおばあちゃんから洋酒が送られてきて使い道に困ってたんです。両親もあまり洋酒が得意でないのです。気に入って頂けたみたいで嬉しいです。」

μ s 9人のチョコを食べた承太郎は各々に感想を伝える。

そしてその後はバレンタインパーティーと称し、楽しんだのだった。

「今日はとても楽しかった。ありがとう。・・・ホワイトデー、期待しとくんだな。」

承太郎からの珍しい冗談。

だが、冗談かどうかわかりづらい。

「ええ、期待して待つときます。・・・期待外れだったらワシワシの刑やで？」

さすがに30の男が17歳の女子高生に胸を揉まれる絵面はヤバいので真面目に考えるでしょう。

「じゃあ、また明日。風邪には気をつけてな。」

「はい！また明日来てください！」

家に帰り、玄関を開ける。

すると、娘である徐倫がかけてきて、

「パパーこれあげる!!」

「・・・む?」

承太郎が受け取ると徐倫は恥ずかしそうに戻って行った。

「なんだったんだ・・・」

自分の部屋に戻り受け取った箱を開けると、そこには歪な形のチョコと共に『おしごとおつかれさま パパだいすき』というメッセージと、『ハッピーバレンタイン。あまり切り詰めないようにね!』と、嫁からのメッセージが添えられていた。

「・・・フツ。」

承太郎はそのいびつなチョコを一つつまみ口に入れる。

そして、ゆっくりと味わい、

「・・・甘いな。」

と、呟いた。

承太郎ら9人の女神からのチョコと愛する家族からのチョコを眺めながら、ひっそりと微笑んだ。

t o b e c o n t i n u e d . . . ?

5話 孤独な天国（ロンリーヘブン）と恋の合図（ラブ・シグナル）

真姫を仲間にした承太郎と海未は、3人で部室に戻る。

部室には先程と何も変わらず、穂乃果とことりが帰り支度をしていた。

「・・・5時前。もうそんな時間だったのね。」

真姫が時計を見て呟く。昼からの半日で壮絶な事をこの5人は体験しているのだ。

「今日はひとまずみんな帰ることにしよう。だが、若しかしたら帰り道にほかのメンバーに出会うかもしれない。できるだけ固まって帰るぞ。」

承太郎からの提案を全員承諾する。4人の殆どはスタンドの扱い方を学んだとは

いえ、戦いの経験は薄いし、ラブライブ予選も近いので怪我をする訳にも行かない。

ー帰り道ー

「そういえば承太郎さんはどこに住んでるんですか？」

穂乃果が承太郎に聞く。

「東京の実家近くの一軒家に住んでいる。そろそろ帰らないと心配するかもしれない。」

「心配？奥さんがですか？」

「いや、愛娘が、だな。」

承太郎が顔を輝かせて穂乃果の方を向く。

「む、娘さんですか？」

（いたんだ……。）

（いるのですね……。）

（いるもののね。）

「前に似たような案件で日本に来る時に娘が『自分も行きたい』とゴネたことがあつてな。」

「え、その時も……」

「ああ。しようがないから連れてきてやつたさ。本当は嫁と留守番させるつもりだったが、子供の涙には勝てん……。」

（意外と子煩悩……。）

承太郎、見た目によらず子煩悩である。

（それに、過去に『徐倫に会った時』、未来の私が軽率な判断をして悲惨な目にあわせてしまっていたからな……。もう『あの神父』はあの時に倒したんだ……。もうこれ以上間違える訳にはいかない。幸せな時間を築いていかなければ。）

「承太郎さん？」

「ああ、すまない。まあ、そんなことがあって、なんの因果なのかそれ以降日本に来ることが多くなつてな。だからついこの前日本に越してきたんだ。」

「・・・アグレッシブな家族ね。」

「まあ、あの二人にとつては旅行のようなものだからな。今日もたくさん東京を見て、また家に戻っているだろう。」

承太郎の娘と嫁の話をしながら帰る途中、聞き覚えのあるふたつの声が聞こえる。

「真姫ちゃん！先輩たちー！」

「あつ！この声は!!」

聞き覚えのある声に穂乃果は元氣よく反応する。

「凜！花陽！大丈夫だったのね。」

同期である真姫が2人に話しかける。

1年生の星空凜と小泉花陽だ。

「まあね。みんなも無事だったかにや？」

「ええ。お蔭さまでね。2人は他の誰かに遭遇したりしてない？」

「いや、みてない・・・かな。遅くなるから、私たちも帰ろうと思つてて。」

花陽が質問に答えつつ、ここにいた理由も話す。

「これで、6、7人目の無事が確認できたわけだな。（残り3人・・・すなわち、『3年

生組』・・・だな。絢瀬はスタンドが判明している分戦いやすいが、残りの2人がわかっていない分少し怖いな。私達は、先ほどまでスタンド使いに遭遇していてな。これ以上危険な目に遭う訳には行かないと固まって帰っているんだ。」

「ふえっ!!」

「えっ?」

「かよちん、空条さんにやあ。数時間前に見たばかりにや。」

・・・フーム・・・。そうか・・・。高校生にはビビられるか・・・。

「あつ、ちよつとダメージ入ってる!」

「ダメです承太郎さん!!気をしっかり持って!!」

穂乃果と海未がすかさずフォローに入る。

承太郎は帰り道、自販機を見つける。

今日は半日で怒涛の出来事が起きた。6人も疲れているだろうから、ジュースでも買ってやろうと思ひ、自販機による。

「承太郎さん、どうかしました?」

「今日は6人とも疲れただろう。私が奢るから、好きな物を買ってやるさ。」

「ほんとですか!やったー!!」

スタンドを持っていても、行動の一つ一つは女子高生だな。

「……………」

承太郎は全員の希望を聞き、順番に買っていくようにする。

財布から1000円を取り出し、投入口に入れようとする

（……………しかし、矢がまだ存在していたとは……………。残骸とはいえ、スタンドを発現させる効果を持つ矢がまだ存在していることをSPW財団に伝えなくてはならぬ……………）
そんなことを考えながら、投入しようとしたが案の定、手元がぶれ、フレームに当たり1000円を落とす。

チャリーンツ……………

「む……………」

承太郎は落とした1000円を拾おうとする。

シュバアツ!!

「ツ!!」

ザシユウツ

「ぐうつ?!」

「承太郎さん?!」

突然として現れた何者かに承太郎は腕に斬撃を負わされる。

攻撃……!?だが、実態が掴めないツ……!

という事はツ! 『敵スタンド』だ!!

……だが本体はっ!?

承太郎は周りを見渡すが、それらしき人物は見当たらない。

「……気の所為か?」

「承太郎さん、今の……!」

穂乃果が駆け寄ってくる。

「ああ。敵スタンドかもしれない。」

「……本体はどこへ?」

海未からの質問。だが、承太郎は首を横に振る。

「まだ掴めていない……! 『遠隔操作型』のスタンドだツ!……しかし、遠隔操作型

にもかかわらず、あのパワー……。本体は近くに居ると見ていいだろう……!」

「み、みんな何を……?」

「せ、先輩方、な、何をしてるにや?」

「小泉、星空ツ!そこから動くな!先程話したスタンド使いが近くにいます!君たちはスタンドを持っていない!動くのは危険だ!」

「……で、でも承太郎さん!このままだと私たち一網打尽にされちゃいます!」

ことりが怯えたように言う。周りを見張るべく、1箇所^{1箇所}に固まっているのだが、これでは全滅しかねない。

「全員バラバラに分かれるんだ！同時に動き出すぞ！」

周りを見渡し、次の攻撃が来ないか確認する。

そして、安全が確認する出来たので、分散する。

「今だ動けっ．．．!?!」

だが、体が動かない。いや、動けないのだ。強い磁石が地面に仕掛けられていて、足とくっついていてるかのように動けないのだ。

「くっ．．．!?!」

「花陽ちゃん!!無事!?!」

「．．．ええ。無事ですよ。でも、いまは自分の身の心配をした方がいいですよ。穂乃果ちゃん。」

「な．．．。」

「まさか．．．!」

「小泉．．．。お前．．．!」

「．．．ええ。ご察しの通りです。私の孤独な天国からは逃れられない。．．．空条さん。．．．貴方を、殺させていただきます。」

ぐ……。ここから動けないことにはどのような攻撃を仕掛けられるかわからない。

……いや、だが……。なぜ『小泉は攻撃してこない』？

我々を一点に拘束した時点で全滅できるはず。

時を止めても、ほかの4人に危害が加わったあとでは遅い。

……まさか……。

「……攻撃できない……のか？」

「空条さん……。前情報と同じ……。あなたはやはり侮れない。その通りです。ロンリーへブンは攻撃力を持ちません。……でも、別に『私がトドメを刺す必要はない。』」

「……やはり、そうか。」

「凜……！あなたまで!!」

花陽の隣には、花陽と同じような、ドス黒いオーラを発している凜が立っていた。

「……わたしからはいつでも攻撃できるにや。……誰からでも……にや。2人で1組。私達は相性がいい。それはスタンドも例外ではないにや。」

……まずい。まずこの拘束から抜け出さねばならない……が、やはりこの集団から抜けることが出来ない。……スタンドも同様のようだ。

ふと、足元を見ると小石が転がっていたが、その転がり方が不自然なのだ。全てふたつで1組などの複数で固まっていたのだ。

「まさか……。」

承太郎はバレないように、スタープラチナの拳の飾りを2ついつぺんに転がす。

コロコロ……

カチンツ

するとうだろう。承太郎達が集まっている場所から意図も容易く脱出し、また離れたところで固まったのだ。

ガシィツ

「え……！ちよ、ちよつと!!」

承太郎はすぐ隣にいた真姫の腕を掴み、1歩を出す。

「……やはりな。」

「ここ、拘束が解けたツ!!?」

「……もう、見破ったのですか……。」

「端から我々は、拘束と言われるほど行動を縛られてはなかったようだ。複数の物や人を1点に集めるスタンドといったところか。だが、そこ集めた1点からは、2人以上で一緒に行動すれば簡単に抜け出せるようだな。」

「さすがですね……。でも、『合図は出してはダメでしたね。』」

「……さっきのあなたの音……しっかりと『合図』^{シグナル}にさせてもらったにや。」

「……音……? (!!まさかッ!!さつき拳の弾丸を転がして、固まった時のあの音ッ!!)」
 「音は……、私の攻撃源にやッ!!ラブ・シグナル恋の合図ッ!!」

そうさけぶと、地面から先程承太郎を攻撃したスタンドが承太郎の腹を貫かんと、飛び出してきた!

承太郎はスタープラチナでなんとか受け止めるが、パワーが大きく吹き飛ばされてしまふ。

「ぐうっ……!」

「きゃあっ!?!」

承太郎と真姫は同時に吹っ飛ぶ。

「承太郎さん!!真姫ちゃん!!」

ことりが2人が吹き飛び、驚嘆の声を上げる。

「!!まずいッ……!」

承太郎は隣にいる真姫を抱き寄せる。

ロンリーヘブンの能力のせいで、承太郎が吹き飛ばすと真姫も同じ勢いで承太郎に合わせて飛ばからだ。

地面に直接激突しないよう体制を変える。

「……ぐ……。なんとか、なったか。真姫!大丈夫か!」

傷は入っていないが気を失っているようだ。

「空条さん。どうするつもりで？ 気を失った真姫ちゃんを抱えて戦うには辛いですよね？」

花陽が妖艶な笑みを浮かべ、承太郎につめよる。

「海未！ 真姫を！」

「構いませんが……！ 私の未来の花は限界が……！」

「大丈夫だ！ 気が戻るまでいい！ 君のスタンドには復元能力もある！」

「そうでした……！ すみません……真姫！ 少しの辛抱を……！」

海未は真姫をフューチャーフラワーのホールで飲み込む。

フューチャーフラワーの能力で真姫を気を失う前に《復元》するのだ。

そして、承太郎は真姫がこの場からいなくなったことで独立した……。というわけではなかった。

「……人は孤独には耐えられないんですよ？」

「独立したのは判断ミスだにや。」

そう凜が呟いた直後、承太郎の体が傾く。

そして、海未と穂乃果とことりの方向にもものすごい速度で突っ込んで行ったのだ！！

「うおおおおおおおおおおおおお！！！」

「ロンリーヘブンの能力が発動している間は孤独でいることは許されない。孤独になったものは、集団を求め、《高速で移動する!》」

「ちよ!?!承太郎さん!?!」

「ダメだよ承太郎さん!!その速度で、その体格で突っ込まれると私たちまで吹っ飛ばすじゃうよ!!」

「穂乃果!ノープランドガールズを!!」

海末が穂乃果にノープランドガールズの能力の発動を促す。

「ツ!そうか!海末ちゃん、有難うツ!肩書きノープランドガールズのない少女ツ!」

ピタアツ

「と、とめ・・・た!?!」

「嘘・・・!?!」

花陽と凜が驚く。

「ノープランドガールズで、ここで止まるように導いたんだよ。この距離であれば、少し移動する程度になるでしょ?」

承太郎が体制を戻し、穂乃果と海末の傍に自動的に移動する。

「ありやりや。あまり意味ない感じだったにや。」

「あれで全員気でも失ってくれればよかったですけどね。まあ、気にする差でもない

ね、凜ちゃん。」

「そうだよね、かよちん。」

2人は、予定通りに行かなかったことに焦りを示すわけでもなく、4人を静かに見つめる。

「じ、承太郎さん……。」

不安そうな声でこどりは承太郎を見つめる。

「……2人を倒すには花陽のスタンドの能力上、『1人の相手に複数人で相手しなければならぬ』……。我々は今、4人だ。だが、海未は能力を発動すると真姫を解放してしまう。それは危険だ。真姫にもこれ以上負担をかける訳には行かない……。」

「……ほ、他に策が……。」

「ああ……。あるにはある。やはり、1人ずつ叩くよりも……。一網打尽にするしかない。」

「!!」

（……あの2人の位置関係が変わっていないということ……。やはり、そういうことなのかもしれない。）

t o b e c o n t i n u e d :

6話 孤独な天国と恋の合図 その2

―飛行機 機内―

「・・・今、その矢によって日本に影響は？」

日本近くの上空を飛行する自家用飛行機。それに搭乗している金髪の少年は隣に座っている変わったヘアスタイルの銀髪の男性に聞く。

「その矢によってスタンド使いに目覚めたかもしれない9人の女子高生を確認したそう
だ。先程、承太郎から連絡を受けた。ひよっとすれば彼女たちと交戦している可能性も
高い。」

「・・・交戦ですか・・・なぜ？」

「簡単だ。その矢を使って何かをしようとしている人間は9人の中にはいない。・・・他に黒幕がいると考えていい。その黒幕がスタンド使いと化した彼女たちを何らかの方法で操って承太郎と戦わせていると見て間違いないだろう。調査協力をするのであれば用心しろ、ジヨルノ。」

「ええ。わかりました、ポルナレフさん。」

「いい、一網打尽にすると言ったってど、どうすれば……。」

「簡単だ。手掛かりとしては小泉のスタンド能力は『自分自身も例外ではない』という事だ。」

「……どうということ?」

「簡単だ。2人の位置関係を見てみる。全く変わっていない。そして、音を合図にする星空のスタンドは『音を鳴らした張本人』を叩きにいく。」

「つまり、音を出るだけ鳴らさずに二人を一気に……ということですか?」

「ああ。私の仮説である、小泉の能力が本人にも有効ならば、音にさえ気をつければひとつの大きな攻撃を当てることで一網打尽にできる。……そうだな。まずは星空のスタンドをどうにかしよう。」

「で、でも、凜ちゃんのスタンドのパワーは強大ですよ……!?!」

「……星空のスタンドは遠隔操作型だ。そして、パワーがMAXなのは出だしだけだろう。一瞬の音を力に変化させる。つまり、地上に出た時はパワーが下がっていると見た。」

「しかし、スピードもあります。見切ることは難しいかと。」

「簡単だ。……私が囷になる。ことりは手筈通りに不可思議なる境^{ワンダーゾーン}を発動してくれ。」

承太郎は思いついた計画を3人に話す。

「なっ!? 危険では・・・!?」

「というか承太郎さん、そんなこと出来たんですね・・・。」

「ああ。前に海末の後ろに周り込めたタネはこの能力だ。数秒しか出来ないから、しっかり頼む。」

「・・・はい!」

「相談は終わりましたか?」

「ふふん、誰が先に殺られるか、じっくり相談して決めたみたいだね。」

「ああ。まずは私が相手をしよう。」

「・・・どうやってするつもりかにかや? ロンリーヘブン孤独な天国はそもそも2人1組じゃなきや動けないんだけど。」

「・・・それを無視させてもらうというわけだ。」

承太郎はことりの手を握り、動き出す。そして、態とらしく先程のスタープラチナの拳の飾りを足で蹴り、音を鳴らす。

「ツ!! 今にや! 恋の合図!!!」

『『スタープラチナ・ザ・ワールド』ツ
!!!!!!!』

ドウウウン・・・

カチ・・・カッチ・・・

「・・・やれやれ、止まった時の中では小泉のスタンド能力は関係ないようだな。まずはことりを元の位置に戻そう。」

承太郎は戻す前にこたりの足元を素早く確認し、不可思議なる境が境を引いていることを目視し、ことりを穂乃果と海未の場所へ戻す。そして、承太郎は花陽と凜の後ろへと回り込む。

「・・・。(6秒に伸びたようだな。私もこの少女たちとのかかり合いで成長している・・・ということか?)・・・時は動き出す。」

スウウウツ

「さあ、砕けつ・・・!? なつ!? ふたりともいないっ!?」

凜のスタンド、ラブ・シグナルは2人を貫こうと地面から飛び出るが、そこに2人の姿はいない。

「あつあれ?も、戻ってる!?!」

「じゃ、じゃあ空条承太郎はどこに・・・!?!」

「ここだぜ・・・。星の白金!!!」

ガシイツ!!

承太郎のスタープラチナはラブ・シグナルの首をしつかりと掴む。

「ぐっ・・・!?!は、はなせ・・・!!」

「・・・掴めればそれでいい。攻撃するつもりは無い。このスタンドは、地中では自由に動けるみたいだが、地上では相手が発した音をエネルギーにして活動するせいかな、そのエネルギーがなくなればすぐに弱くなるようだな。」

「り、凜ちゃんを離して!!」

「・・・それは出来ない。君たちを操っている何かを、取り払うまではな。」

「・・・!」

その時だった。

《チリンチリンッ》

!!!!

近くを通った自転車が猫を退かせるべく、ベルを鳴らしてしまったのだ!!

「・・・!パワーを貰ったにや!!恋ラブ・シグナルの合図!今度こそ貰くにや!!」

「っ!オラアツ!!」

ドグアツ!!

「にや・・・!?!」

承太郎は相手の拳に素早く反応し、スタープラチナを叩き込んだ!

凜が吹き飛び、それにもない傍にたっていた花陽と承太郎も飛ぶ。

承太郎は吹き飛ぶことを知っていたので着地できたが、花陽は倒れ込んでしまう。

「どうやらお前たち2人も、能力の例外ではないようだな。能力を使っている張本人でさえも、スタンド能力に従う。ならば、そこを一網打尽にするしかない。」

「な、なにを……!!」

「……2人とも、これで終わりだよ。不可思議なる境!!」

ワンダーゾーンの境に入っていた2人はワンダーゾーンのレーザーが飛んでくることに気づく!

「っ! 孤独^{ロソリヘッ}な天国! 能力を解いて!!」

花陽と凜はすぐに立ち上がり、能力を解除したのでバラバラに逃げる……、が。

「……そこは、まだ、ことりの『境界』だよ。」

1本のレーザーは途中で2本にわかれ確実に2人を捉えた!!

「きゃああああああ!!」

「にゃああああああ!!」

ドサアツ……

「勝ったの……?」

穂乃果が心配そうにことりの顔を覗き込む。

「……ああ。気を失っているだけだ。」

「……! 真姫が、意識を取り戻したみたいです。」

そう言うとう海未は未来の花から真姫を出現させる。

「・・・私、気を失ってみたいね。海未には迷惑をかけたわ。」

「いえ、気にしないでください。仲間でしょう?」

「そうね。・・・2人の治療は私に任せて。」

「ああ、頼む。」

真姫が治療を終えると、2人はすぐに目を覚ました。

「う、うん・・・?こ、ここは?」

「気がついたか?」

「うわあああああ!?あ、く、空条さん・・・。」

・・・。

「ああ!?承太郎さんがその場に座り込んでしまった!」

「仕方ないんです!!許してあげてください!!」

「その慰め方もちよつと違うよ海未ちゃん・・・。」

「強面つてのも、辛いもんなんだぜ・・・。」

(ひ、悲壮感が・・・。)

承太郎の悲しそうな顔に穂乃果が息を呑む。

「り、凜達はなにを……。」

「……君たちはどうやらスタンド使いになったことに間違いないみたいだ。……、どうやら、君たちを利用して私を殺させようとする人間がいるみたいだな。」

「……それはどういうことですか!？」

「スタンドが発現して間もない頃は精神に異常が出やすい。精神が具現化したものだということを理解出来ず、抱え込む人間が多いからな。……もし、そこに漬り込んで、相手を操れるスタンドを持つ人間がいるとするならば、君たちが自我をなくして私たちを始末しようとしていることに説明がつく。」

「そ、そんな……!許せません……!!」

海未が怒りをあらわにする。

「り、凜も許せないにや……!それに、穂乃果ちゃんたちを危険な目に遭わせてしまつて申し訳ないにや……。」

「……仕方の無いことよ。気にしないで。明日は先輩3人を元に戻すわよ!」

真姫が気にするなと言うように凜と花陽の肩を叩く。

そして、6人へと戻つたμ sは承太郎と共に、3年生たちを救うことを決心した。

—————

「……やはり上手くないかないか。μ sのスタンドも厄介だけど……。」

謎の人物は暗闇の中、空条承太郎の写真を弾く。

「・・・この男が1番面倒ね・・・!!」

t o b e c o n t i n u e d . . .

7話 メイデン・スタイル・ラブ・スクール その1

凜と花陽の手当を終え、承太郎たちは再び帰路へ戻る。

その前に承太郎はOWSONへとより、ジュースを6本とコーヒーを1本買って出てきた。

「自販機で買うつもりだったが、有耶無耶になったからな。1人1本取るといい。」

穂乃果達は嬉しそうにお礼を言う。

正直いって、戦闘で動きまくっていたので喉はカラカラだったのだ。

「ぶはー！身体にしみ渡るうー!!!」

「穂乃果、おじさんっぽいですよ。」

面白い反応をするものだ。

「承太郎さんは、明日どうするの?」

「勿論明日も音ノ木坂に行くつもりだ。残りの3人を元に戻さないと、学校にも支障が出るだろう。問題は早いうちに無くさないと。」

「にこちゃん・・・、希ちゃん・・・。・・・絵里ちゃん。」

3人のことを考えると、少し気が落ち込んでしまう。

ことりは心配そうに3人の名を言う。

「・・・弱気になつちやダメにや!!みんな、私たちのことを戻してくれたんだから!3人も元に戻るにや!!」

「・・・そうだよ!!承太郎さん!よろしくお願いします!!」

「ああ。当たり前だ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらく歩き、ほかの6人とは道が分かれたので、ここで挨拶を交わす。

「じゃあ、また明日。」

「はい!さよなら!!」

「「「「さよなら!!」」」」

一人で歩きながら、考える。

「・・・やはり、財団の考えた通りだったか。しかし、どこから矢が流出したと言うんだ・・・?矢は俺が1本、パッションネで2本・・・。これだけのハズ・・・。いや、我々が知らないだけで、その前に誰かが発掘済みだったのか・・・?」

いや、これ以上は考えても仕方が無い。

「・・・ひとまずは家でゆっくりしよう。」

承太郎はそんなことを考えながら、玄関を開ける。

「パパ！おかえり!!」

「おかえりなさい、あなた！」

「ぬおっ!!」

玄関を開けた途端、承太郎は娘と妻に抱きつかれる。

「・・・やれやれだぜ。ただいま。」

承太郎は困ったように微笑みながら抱き返す。

そして、直ぐに引き離しコートをコート掛けにかける。

そして、リビングのソファに座る。

「今日は何処へ？」

「出る前に言っておけばよかったな。すぐそこの高校に行っていた。暫くはその高校で厄介になる予定だ。」

「すぐそこの・・・、あ、ひよつとして音ノ木坂!」

ー空条エマー

承太郎の妻。スタンド使いでもない、普通の一般人。最近、承太郎と娘と共に日本に引越してきた。

ー

「ほんと!? パパそこにお仕事いったの!」

―空条徐倫―

承太郎の娘。スタンド使いではない。パパっ子である。ママっ子でもある。どっちも好き。

「ああ。・・・とはいっても、本格的に授業するのは来週からだが・・・。」

「音ノ木坂つて言えばムッsがいる高校じゃん。いいなーパパ。」

「・・・そうはいつでも仕事だからな。」

「・・・パパ怖がられそうだしね。」

・・・さすがだな我が娘。俺が花陽に怖がられていたことを偶然とはいえ見抜くとは。

「・・・凶星だった？」

「仕方ないのよ。この人は怖い顔だけど優しい人なんだから。音ノ木坂の子達も分かってくれるわよ。」

「仕方ないとは・・・。」

「事実だし仕方ないでしょ。もうすぐご飯できるから、先に入ってきたら？」
「そうするよ。」

そう言いながら俺が立って風呂場に向かう。その後ろを徐倫が着いてくる。
なんてことない、いつもの日常だ。この家庭も私が守っていかなくては。

風呂と飯を済ませ、徐倫を寝かせた後、自室に戻る。

ちなみに作業を行う自室と寝室は別。エマと徐倫曰く、自室にベッドや布団を用意すると俺が籠もりきりになるからだとか。

・・・あながち間違いではない。

「・・・」まず、現時点でのスタンド使いの情報を送っておくでしょう。」

パソコンを開き、現時点での事を話すべく、財団の人間にビデオ通話をかける。その先は――

花京院典明。俺が高校生のとき、D I Oを倒す旅に出た際の仲間だ。・・・D I Oから致命傷を受けたが、スタープラチナ・ザ・ワールド・オーバーヘブンの能力のお陰で生存させることが出来た。アヴドウルもイギーも同様だ。イギーは元の生活に、アヴドウルは財団にも協力しつつ占いの家業に。そして、花京院は研究員として、財団に勤めている。

T r r r r r r . . .

「もしもし?。」

「済まないな突然。今、構わないか?。」

「もちろんさ、承太郎。ところで、音ノ木坂の調査はどうだった?。」

「財団の考えの通りだった。μ sの9人はスタンドを持っていたよ。」

「……やはりそうか。今のところ危険性は？」

「……彼女たちには無い。」

「……つまり、彼女たち以外のところに危険性が潜んでいるということだね？」

さすが花京院だ。俺の予想をズバリと当てた。

「その通りだ。何者かが、彼女たちを操って、混乱に陥れようとしている。……が、彼女たちはスクールアイドルだ。スタンドを持つていえるとはいえ、な。なんとか、その第三者を突き止めて、倒す事が今回の最終的な仕事になるだろう。」

「……とはいえ、操るといふことは彼女達も君の前に立ちはだかつたのだろうか？ どう対処したんだい？」

「体に傷をつけるようなことはしていない。……が、油断すれば此方が死にかねんスタンド能力を彼女たちは持つている。相手のスタンドの穴を突くようにして、できる限り傷つけないようにしている。」

「聞く限り無理難題のようだけど……ま、君なら出来るだろうね。というか、やり遂げてるんだらうな。」

「まあ、な。それでだが、花京院。」

「なんだ？」

「財団側でその第三者になりかねない人間を洗い出してほしい。俺が今持つ情報には当てはまる人間が居ない。」

「・・・構わないが、そいつがスタンド使いかどうかまで調べあげるには多少の時間がかかるぞ?。」

「構わない。ひとまずの仕事はスクールアイドルの暴走の沈静化とスタンドの使い方の享受だからな。それが済んでからでも構わない。可能性がありそうな人間のデータを送ってほしい。」

「分かった。怪しい人間はこっちで洗っておくよ。承太郎の方も頼んだよ。」

「ああ。」

・・・今日はもう寝よう。少し無理をしたような気もする。

だが、迅速な対応が求められている今は、多少無理をしても彼女たちの沈静化に向かった方がいいだろう。

「あら、あなた、仕事はもう終わり?。」

「ああ。あまり詰めるのも良くないからな。今日はもう寝ることにする。」

「・・・あまり、無理しちゃダメよ。」

「・・・分かってる。お前たちに心配はかけさせない。」

「ふふつ、ありがと。」

翌日の昼頃、テストが終わった頃だ。さて、今日も音ノ木坂に向かうとしよう。

……しかし、学校前のこの階段は昨日ぶりだが見るとしんどい。上るのもそれこそしんどいが……。

(……? なにか学校が騒がしいな……?)

「じよ、承太郎さあーん!! た、助けてええー!!!」

「な、なんなのよコレえ!!!」

な……!?!? sの6人が……、逃げ惑っている!?

「どうした!? 敵スタンドか!」

「い、いえ……、そうかもしれないし……、そうじゃないかもしれないし……。」

目の前で息を切らしながら海未が説明する。

「……まるで意味がわからんぞ。」

「で、ですから……、あつ!?! ま、また来たア!?! すみません承太郎さん! また後で!!」

そういい、海未は再び走り去っていった。

が、その直後、承太郎の右側から轟音が聞こえる。

(な、何かがこちらにきている……!!)

敵の攻撃かと思ったら違う。

「園田さーん!!!」

「海未さーん!!!」

「……音ノ木坂の生徒……!?数十人が海未を追っていたぞ……!?」

あれもスタンドの能力によるものなのか……!?」

すると、自分のスマホが鳴る。穂乃果だ。

「穂乃果!大丈夫か?」

『え、ええ……。はあ……。はあ……。し、死ぬかと思った……。』

「一体何があつたんだ?」

『わ、分からないです。学校に来て、テスト終わって、部室でみんなでくつろいでたら急

にクラスのみんなが来て……。な、何とか窓から逃げ出せたんですけど……。』

「……。恐らく、それも敵スタンドの仕業だ。生徒たちから危害の危険性は?」

『……。それが、無いんです。ことりちゃんは1人に追いつかれましたけど、サインを求

められたただけだって……。』

「……。?相手のスタンドの能力が掴めないな。何がしたいんだ……。?」

『ですが、サインを書いた後にその人以外の追跡が激しくなつたみたいで……。』

「それだったら、やはり今の彼女達に関わるのは良くないだろう。幸い、誰からも何も無

いようだから、校内を探索してみよう。穂乃果たちはどこかに身を隠してくれ。危害を

加えない程度なら、スタンドも使って構わない。」

『わ、分かりました！頑張ります！』

素晴らしい、穂乃果との通話を切る。

しかし、校内のあちこちから喧騒が聞こえるな……。

「ドワイウコトニヤー!!」「ダレカタスケテー!!」

ちよつと待つてろ。

……だがあまり時間をかけると、sの子達に負担をかけそうだ。はやくスタンド使いを見つけよう。

……候補としては、東條か矢澤……。絢瀬は無いだろう。アイツのスタンド能力は把握している。一度部屋に向かうとしよう。

―スクールアイドル研究部部屋―

「……鍵は開いているな……。」

それに、人影も見える。……誰かいるようだ。

少しだけ扉を開き、様子を見る。

「……どうしようかしらね、この男は。コイツだけ条件が揃ってないのよ……！これじゃ能力を発動できないじゃない……！」

あれは……、矢澤？

手にはノートを持っているようだが……。あれが彼女のスタンドか？

「……！誰!？」

「……見つかつたか。」

「く、空条承太郎……！」

「それが、君のスタンドか？」

「……まあね。これが私のスタンドよ。」

「学校の生徒たちがあんなっているのも、君が操っているからか？」

「この質問に対し、矢澤は不敵に笑う。」

「操る？ふふつ、少し違うわ。私はただ、このスタンドで『好き』という気持ちを表に出してあげただけ。どんな感情よりも、どんな理性よりも、表に出してあげたの。好きが故の暴走つてどこかしら。」

「好きを表に……!？」

「どんな理性よりも……、だと？」

「……たしかに、人の『愛情』、『愛着』という感情はどこかタガが外れるだけでおかしな方向に向かつてしまう……。それを誘発させるスタンドだと言うのか？」

「……私のスタンド、『メイデン・スタイル・ラブ・スクール』は好きという気持ちの

ブレーキを外してあげるの。そして、その好きという感情はときには……。」

『『凶器狂気』になるものなのよ。』

T o b e c o n t i n u e d . . .

8話 メイデン・スタイル・ラブ・スクール その2

「…………… どうする。相手はほかのメンバーの時とは訳が違う。スタンドも攻撃するタイプではない。攻略する手立ても少ない。それに、正気に戻せるのか……………」？

「まあ、感づいているとは思うけど、私のスタンドはノートの形をしているの。ここに好意を持つている人間の名前と、どのように感情を暴走させるかを書く。それだけである状況の完成よ。」

「だが、君のスタンド自体に攻撃力は無い。」

「…………… 悔しいけど、その通りよ。私だけじゃアンタは殺せないってのが現実。それに、μ sのメンバーも、スタンド使いとして強くなってきた。だから、私は消耗戦に持ち込ませて、疲れた奴から私が直接手を下すつもりだったんだけど……………」

「そのスタンドには弱点がある、それ故に私の存在が尚更面倒になったわけだな。」

「ええ。アンタが誰に好意を持っている、その逆で誰がアンタに好意を持っているなんて私を知るはずないもの。私のスタンドは飽くまでも『好き』という気持ちを表に出させるだけ。そもそも相手に好意を持っていなければ何も起きないし、誰に対して好意を持っているかまで把握しないといけないのよ。」

「……………？じゃあなぜ、あれだけの人数を暴走させられているんだ。」

「それは簡単よ。この学校に μ 、 s のファンなんてごまんといる。1年と2年のメンバーのファン、なんて書き方でもどうやら通用するみたいね。ここはアウトでもいいみたい。」

「なるほどな。そういう理論だったわけか。ならば、どのようにして私を倒すつもりなんだ？」

「それがねえ、ゲームオーバーなのよ。アンタがここに来た時点で。」

……………
「どういう事だ？」

「わたしはただの囷。というより、アンタをここに誘き寄せるためなの。」

「つまり、他に本命がある、ということか。」

「そうね……………もう出てきてもいいんじゃないの？」

矢澤が誰かに話しかける。

「にこつち、お疲れさん。こつからはウチの仕事や。」

「……………東條。」

「聞き飽きたかもせんけど、あえて言わせてもらおう。」

『ウチには、勝てんよ。』

その瞬間、東條の背後からなにか散弾のようなものが飛んでくる。

承太郎はそれをすんでのところ、その散弾は承太郎にとつても見なれたものだった。

（…………… なっ…………… !? 『エメラルドスプラッシュ』…………… !? 馬鹿な！花京院と同じスタンド…………… ? いや！そんなことはありえない…………… 。 同じスタンドはひとつとしてないはず…………… ツ!!）

ゴゴゴゴゴゴ……………

「今回は…………… 『法皇』や。さて、次、ウチの『マイ・ウィッシュ』はどのカードを示すやろなあ?」

To be continued…